【1】帝釈天が「半座を分かつ」伝承

［0］はじめに帝釈天が半座を分かつ伝承を紹介する。帝釈天から半座を提供された人物として、マーンダートリ、ニミ、*Mahābhārata* の英雄アルジュナがある (1) 。

（1）上に【0】－［2］で言及したカーリダーサなどの後世の詩人の手になる資料でのみ「半座」が言及される場合、以下の論考では用いないこととする。例えば *Śākuntala* のドゥシュヤンタ王は、*Mahābhārata* の「シャクンタラー物語」では帝釈天から半座を提供されることはない。

［1］まずマーンダートリが帝釈天から半座を分かたれた伝承を紹介する。

［1-1］「マーンダートリ（Skt. ; Māndhātṛ, Pāli ; Mandhātar）」とはある転輪王（Cakravartin, Cakkavattin）の名である。この王についてはヒンドゥー教と仏教の両方に伝説があり、伝承には共通する部分とそれぞれに独自な部分も存する。

パーリ聖典では *AN.* 004-002-015（vol. II　p.017）、*Therīgāthā* のスメーダー尼の偈（vs. 486, 487）、*Apadāna* 04-02-017（p.532）、*Jātaka* 258 の偈文部分に名前が言及されている。これらの記事はあまりに簡単であるため、マーンダートリの特徴がはっきりせず、帝釈天から半座を提供されることも述べられていない。しかし *AN.* と *Therīgāthā* は下に見る詳細な伝説の要素のうち「四洲の王」や「七宝（satta ratanāni）または金銭（kahāpaṇa）を雨と降らせる」ことにすでに言及し、マーンダートリが「諸欲を享受する者たちの第一人者である」とされている (1) 。

ヒンドゥー教の伝承では、*Mahābhārata*（3.126 など）と諸プラーナにこの王にまつわる伝説が語られる (2) 。

この王にまつわる伝説に関して、仏教とヒンドゥー教とで一致する点と相違する点とを明らかにすると、マーンダートリの誕生の仕方がヒンドゥー教文献と仏教文献の両方で父親から生まれたとする点では一致する。しかし父親の名は異なっており、ヒンドゥーでは Yuvanāśva とされ、その脇腹（左右両方の伝承がある）から誕生する (3) 。仏教では Upoṣadha（Pāli ; Uposatha）王 (4) の頭にできた腫れ物から生まれる。このゆえに仏教文献においてのみ、彼には「頂生」（Mūrdhāta）の別名があり、彼の誕生は四生のうちの胎生ではなく、湿生または化生とされる (5) 。

名前の由来にも仏教とヒンドゥー教の間に関連が見出せる。ヒンドゥー教では帝釈天がマーンダートリの誕生の際にやってきて指をしゃぶらせ、「私の指を（māṃ）吸いなさい（√dhe）」と言ったこと (6) 、仏教では乳母たちが子をとりあって「私の乳を吸いなさい」と言ったことが (7) 「マーンダートリ」の名前の由来とされる。命名のもととなる言葉を発した人物を帝釈天とするか乳母たちとするかで異なっているが、名前の通俗語源解釈は一致している。

Mahābhārata にはマーンダートリが 12 年間の旱魃に際して雨を降らせたことが伝えられている (8) 。これは仏教では金銭を雨と降らせたという伝承になって多少変化しているが、雨を降らせる神である帝釈天とマーンダートリとが深く関連づけられていることは重要である。上に見たマーンダートリの命名に際してヒンドゥー教の伝承で帝釈天がかかわることもそれを窺わせるが、仏教の伝承においてはマーンダートリの寿命が帝釈天と比較されて甚だ

しく長くされている (9) 。

仏教文献においては、マーンダートリは釈迦族の祖先の王統中に加えられ、物語の筋はかなり定型化していてすべてほぼ以下の形である。

南閻浮提の王であるマーンダートリが、東勝身洲、西牛貨洲、北倶留洲に進軍して支配し、それでもあきたらず三十三天に昇る。四天王も彼と戦って退けることを望まず、帝釈天のところへ行かせる。帝釈天は彼を歓迎して半座を提供し、２人で天界を支配する。長い期間が過ぎた後、マーンダートリが帝釈天を滅ぼしてひとりで天界を支配しようという欲望をもつやいなや、地に落ちて命終する。そしてこれは釈尊の前生である。

この形はパーリでは *DN.-A.*（*Sumaṅgalavilāsinī* vol. II p.481）、*MN.-A.*（*Papañcasūdanī* vol. I p.225）、*Jātaka-A.* 258（vol. II p.310）に語られ、北伝の伝承のある程度まとまった記述としては、*Mūlasarvāstivādavinaya Bhaiṣajyavastu*（Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts*, vol. III part 1 p.092）、*Divyāvadāna*（Cowell 本 p.210）、『中阿含経』（大正 01 p.495 中）、『頂生王故事経』（大正 01 p.822 中）、『文陀竭王経』（大正 01 p.824 上）、『増一阿含経』（大正 02 p.583 中）、『六度集経』（大正 03 p.021 下）、『頂生王因縁経』（大正 03 p.393 上）、『賢愚経』「頂生王品」（大正 04 p.439 中）、『大宝積経』「菩薩見実会」（大正 11 p.429 下）、『父子合集経』（大正 11 p.974 上）、『大般涅槃経』40 巻本（大正 11 p.437 下）、『同』36 巻本（大正 11 p.679 中）、『根本有部律』「薬事」（大正 24 p.056 中）がある。

南伝においてはマーンダートリが閻浮洲の他の洲に行軍するのではなく、３つの洲から人々が到来するという筋になっている。また北伝には禅定を妨げた鳥たちから羽を奪った牟尼を追放する物語が挿入されるなど (10) 、細部にはかなり異なりがあるものの、おおよその筋はどれも似通っている。そして帝釈天から半座を提供されるくだりは上記の資料にはもちろんのこと、その他の資料にも言及されている。

［1-2］マーンダートリは上記のような人物であるが、このマーンダートリが帝釈天から半座を譲られて、天界を２人で統治したことを伝える伝承には、以下のものがある。帝釈天とマーンダートリが座を共有して坐っている状況を描写する記事が以後の吟味に重要であるので、その点に留意して資料を紹介する。特に重要と思われる箇所に下線を付した。

（1）*Mahābhārata*（3.126.35）

citacaityo mahātejo dharmaṃ prāpya ca puṣkalam /
śakrasyārdhāsanaṃ rājaḷ̇ labdhavān amitadyutiḥ // 35 //

王よ、霊廟を建設し（citacaitya）、偉大なる力を備え、無量なる光を備えた王は、多くの徳を獲得して、インドラ神の座の半分を獲得した。

（2）*Rāmāyaṇa*（7.59）

indrasya tu bhayaṃ tīvraṃ surāṇāṃ ca mahātmanām /
māndhātari kṛtodyoge devalokajigīśayā // 7 //
<u>ardhāsanena</u> śakrasya <u>rājyārdhena</u> ca pārthivaḥ /
vandyamānaḥ suragaṇaiḥ pratijñāṃ adhyarohata // 8 //

マーンダートリが天界を獲得しようと努力している時に、インドラと偉大な神々とに大きな恐怖があった。インドラの<u>半座と王国の半分</u>によって、王は神々の群れに敬

われつつ誓いを立てた。

(3) *DN.-A.* (vol. II p.482), *MN.-A.* (vol. I p.226) ; sakko : mandhātā āgato ti sutvā va tassa paccuggamanaṃ katvā : 'svāgatan te mahārāja, sakan te mahārāja, anusāsa mahārājā' ti vatvā, saddhiṃ nāṭakehi rajjaṃ dve bhāge katvā ekaṃ bhāgaṃ adāsi. raññо tāvatiṃsa-bhavane patiṭṭhitamattass' eva manussa-bhāvo vigacchi, deva-bhāvo pātur ahosi. tassa kira sakkena saddhiṃ paṇḍu-kambala- silāyaṃ nisinnassa akkhi-nimesanamattena nānattaṃ paññāyati. taṃ asallakkhentā devā sakkassa ca tassa ca nānatte muyhanti.

帝釈天は「マーンダートリが来た」と聞いて、彼を迎えに出て、「善く来られた、大王よ、〔すべては〕陛下のものです。大王よ、命令してください」と言って、眷属(11)とともに王国を二分して、その一分を与えた。王が三十三天に住み着くやいなや人間性が消えて神性が現れた。彼が帝釈天とともにパンドゥカンバラ岩に坐った時に、眼のまばたきだけに違いが認められたそうだ。それに気がつかない神々は、帝釈天と彼との違いが分からなかった。

(4) *Jātaka-A.* 258 'Mandhātu-j.' (vol. II p.312) ; sakko māndhātuṃ tāvatiṃsa-bhavanaṃ netvā devatā dve koṭṭhāse katvā attano rajjaṃ majjhe bhinditvā adāsi. tato paṭṭhāya dve rājāno rajjaṃ kāresuṃ.

帝釈天はマンダータルを三十三天に連れて行って、神々を二分し、自分の王国を真中で分けて与えた。それ以来、２人の王が国を治めた。

(5) *Divyāvadāna* (Cowell 本 p.222) ; teṣām eva devānāṃ sarvānte mūrdhātasya rājña āsanaṃ prajñaptam. paścād devās trayastriṃśā mūrdhātasya rājño 'rghaṃ gṛhya pratyudgatāḥ. tatra ye puṇyamaheśākhyāḥ sattvā anupūrveṇa praviṣṭāḥ. avaśiṣṭā vahiḥ sthitāḥ. yataḥ sa rājā mūrdhātaḥ saṃlakṣayati. yāny etāny āsanāni prajñaptakāny etebhyo yad antimam āsanam etaṃ mama bhaviṣyati. atha rājño mūrdhātasyaitad abhavat. aho vata me śakro devānām indro 'rdhāsanenopanimantrayet. sahacittotpādād eva śakro devānām indro rājño māndhātur ardhāsanam adāt. praviṣṭo rājā mūrdhātaḥ śakrasya devānām indrasyārdhāsane. na khalu rājño mūrdhātasya śakrasya devānām indrasyaikāsane niṣaṇṇayoḥ kaścid viśeṣo vābhiprāyo vā nānākaraṇaṃ vā yad utārohapariṇāhau varṇapuṣkalatā svaraguptyā svaragupter nānyatra śakrasya devānām indrasyānimiṣatena.

それらの神々の最後〔三十四番目〕に頂生王の座が設けられた。それから、三十三天の神々は頂生王に対する表敬の贈り物を持って会いに行った。そこで、福徳故に偉大なる人たちは順次中に入り、残りの者たちは外に立っていた。そこで頂生王は考えた。「これらの設けられた諸々の座の末席が私の座なのか」。それから頂生王にこのような考えが浮かんだ。「ああ、帝釈天が私に半座を提供すべきだ」。そのように考えるやいなや、帝釈天がマーンダートリ王に半座を与えた。頂生王は帝釈天の半座に就いた。一つの座に坐る頂生王と帝釈天の２人の間にはいかなる違いもなかった。すなわち、背格好（ārohapariṇāha）、皮膚の色合い（varṇapuṣkalatā）、声の質

（svaragupti）は〔まったく同じであった〕(12)。帝釈天が瞬きしないということを除いて。

（Cowell 本 p.225）；yasminn ānanda samaye rājā mūrdhāto devāṃs trayastriṃśān adhirūḍha evaṃvidhaṃ cittam utpāditam, aho vata me śakro devānām indro ’rdhāsanenopanimantrayeta, kāśyapo bhikṣus tena kālena tena samayena śakro devānām indro babhūva. yasmin khalv ānanda samaye rājño mūrdhātasyaivaṃvidhaṃ cittam utpannaṃ yan nv ahaṃ śakraṃ devānām indram asmāt sthānāś cyāvayitvā svayam eva devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca rājyaiśvaryādhipatyaṃ karayeyaṃ, kāśyapaḥ samyaksaṃbuddhas tena kālena tena samayena śakro devānām indro babhūva.

アーナンダよ、三十三天に上った頂生王が「ああ、帝釈天が半座を私に提供するべきだ」と考えた時に、迦葉比丘がその時に帝釈天であった。アーナンダよ、頂生王に「さあ私は帝釈天をこの地位からひきずり降ろして自分だけが神々と人間の王国の王の地位に君臨しよう」という思いが生じた時に、迦葉仏がその時の帝釈天であった。

（6）『中阿含経』（大正 01　p.495 中）；彼頂生王即到三十三天。彼頂生王到三十三天已即入法堂。於是天帝釋便與頂生王半座令坐。彼頂生王即坐天帝釋半座。於是頂生王及天帝釈都無差別。光光無異。色色無異。形形無異。威儀禮節及其衣服亦無有異。唯眼眴異。……

（7）『頂生王故事経』（大正 01　p.823 中）；爾時釋提桓因遥見頂生王來。見已便語頂生王曰。善來、大王、可就此座。爾時阿難。頂生王即就座而坐。與釋提桓因同坐。此二王同坐而無有異。顔容姿貌正等無異。唯眼眴異。……釋提桓因與頂生王半座使坐。二人同坐光色無異。顔彩容貌皆悉同一。唯眼眴異。

（8）『文陀竭王経』（大正 01　p.824 下）；便前入天王釋宮。釋遥見文陀竭王來。便起迎之言。數聞功徳欲相見日久。仁者來大善便牽與共坐。以半之座與文陀竭王。適坐左右顧視天上有玉女侍使。

（9）『増一阿含経』（大正 02　p.584 中）；爾時天帝釋遥見頂生聖王來。便作是説。善來、大王、可就此坐。爾時阿難。頂生聖王即共釋提桓因一處坐。二人共坐不可分別。顔貌擧動言語聲響一而不異。

（10）『六度集経』（大正 22　p.22 上）；入帝釋宮。釋覩王來。欣迎之曰。數服高名久欲相見。翔茲快乎。執手共坐。以半座坐之。王左右顧視。

（11）『頂生王因縁経』（大正 03　p.403 上）；帝釋天主安處其上。餘諸天衆如次設座。最後安布頂生王座。爾時帝釋天主與諸天衆持閼伽軼餅、前起承迎彼頂生王。時頂生王大威徳者依次而入。餘諸侍從各列于外。王乃惟忖。我今亦應處是座耶。又念帝釋天主若分半座命我同坐豈不快哉。佛言。大王。彼頂生王作是念時。帝釋即知乃分半座命其同坐。時頂生王與帝釋天主共處其座。大小身相容止威光音聲語言及莊嚴具悉無有別。唯王目瞬異於天主。……

（p.405 下）昔於三十三天起念欲。其帝釋天主分于半座。是時迦葉苾芻方爲帝釋。又頂生王復起是念。若帝釋天主於此座中即謝世去。天上人間我爲王者豈不快哉。是時迦葉如來爲帝釋天主。

（12）『仏本行集経』（大正 03　p.670 中）；我又曾作一轉輪王、名爲頂生、得四天下。復得帝釋半座而坐。以是果報、今得成於阿耨多羅三藐三菩提、乃至轉於無上法輪……

（p.752 中）往昔有王名曰頂生。彼王已得統四天下、猶不知足、騰上至彼三十三天、得於帝釋半座而坐。以其内心不知足故、五欲境界便即失盡。……

（p.761 下）往昔頂生聖王主　降伏四域飛金輪　復得帝釋半座居　忽起貪心便墮落

（13）『仏所行讃』（大正 04　p.020 上）；曼陀轉輪王　王領四天下　帝釋分半坐　力不能王天……

（p.020 下）曼陀轉輪王　普天雨黄金　王領四天下　復希忉利天　帝釋分半座　欲圖致命終

Buddhacarita（11-13）；devena vṛṣṭe ’pi hiraṇyavarṣe dvīpān samagrāṃś caturo ’pi jitvā / śakrasya cārdhāsanam apy avāpya māndhātur āsīd viṣayeṣv atṛptiḥ //

黄金の雨が降っても、四洲をすべて征服しても、インドラの半座を得ても、マーンダートリは感官の対象に満足しなかった。

（14）『中本起経』「大迦葉始来品」（大正 04　p.161 中）；過去久遠時有聖王、名文陀竭。高行暉世、功勳感動。忉利天帝欽其異徳、即遣車馬、詣闕迎王。王乗天車、忽然升虚。天帝出迎與王共坐、娯樂盡歡。送王還宮。佛告比丘。<u>爾時天帝者大迦葉是也</u>。文陀竭王者則是吾身。往昔天帝以生死畏座令吾並坐。吾今以無上正眞法御之座、報昔功徳。佛説本昔 (13)。

（15）『賢愚経』「頂生王品」（大正 04　p.440 中）；帝釋尋出、與共相見、因請入宮、與共分坐。<u>天帝人王貌類一種。其初見者不能分別。唯以視眴遲疾、知其異耳</u>。王於天上受五欲樂。盡三十六帝。<u>末後帝釋是大迦葉</u>。

（16）『大宝積経』「菩薩見実会」（大正 11　p.427 中）；（無量称王）爾時帝釋遥見無量稱王、歡喜來迎而作是言。善來、大王。即分半座命王令坐。王即就坐。在彼天上經無量歳。與彼天主分半而治。……

（p.429 上）（地天王）爾時帝釋遥見地天大王、作如是言。善來、大王、善哉、大王。即分半座命王令坐。王即就坐。爾時地天在彼天上。經無量百千歳分位而治。……

（p.430 下）（頂生王）爾時帝釋遥見頂生從遠而來、即出迦之、作如是言。善來、大王、善來至此。即分半座命王令坐。王即就座。時頂生王坐半座時、即有十種勝事映蔽諸天。何等爲十。一者壽命勝天。二者容色勝天。二者名稱勝天。四者受樂勝天。五者王領自在勝天。六者形貌勝天。七者音聲勝天。八者香氣勝天。九者食味勝天。十者細觸勝天。大王。爾時頂生與彼帝釋<u>形容相貌行動威儀等無差別、飲食衣服資生之具悉無有異。唯有視瞬爲則異耳</u>。

『父子合集経』（大正 11　p.972 下）；（無辺称王）彼帝釋天主即時遥見無邊稱王歡喜來迎而作是言。善來、大王。即分半座命王而坐。時無邊稱王即就其座、住於天上經無量歳。與彼天主分半同治。……

（p.973 下）（地天王）時帝釋天主見地天王自遠而來、即起奉迎善言問訊、分座令坐命王同治。……

（p.974 中）（曼達多王）時帝釋天主見曼達多王自遠而來、即出迎之作如是言。善來、大王、遠至於此。乃分半座命王同坐。曼達多王就彼坐時、有十種事勝彼天主。一

者壽命。二者容儀。三者名稱。四者快樂。五者自在。六者端正。七者音聲。八者身香。九者食味。十者細觸。時曼達多王與彼天主形色受用悉皆相似。唯目瞬動爲其別也。

『大乘集菩薩学論』（大正 32　p.125 上）；（如父子合集經云。……）乃往過去無量世時、有轉輪王、名無量稱。威德名聞富貴自在。統四大洲獨爲尊勝。隨所意樂而得受用、一切林樹常有花果。時世人民安隱無惱。復能降雨衆妙香水金銀珍寶種種資具。諸有所須普皆充足。忽於一時昇忉利天、帝釋天主分座令坐 (14) 。

（17）『大般涅槃経』（40 巻）（大正 12　p.439 上）；於是天主釋提桓因知頂生王已來在外。即出迎逆見已執手、昇善法堂分座而坐。彼時二王形容相貌等無差別。唯有視眴爲別異耳。

『大般涅槃経』（36 巻）（大正 12　p.680 中）；於是天主釋提桓因知頂生王已來在外。即出迎逆見已執手、昇善法堂分座而坐。彼時二王形容相貌等無差別。唯有視眴爲別異耳。

（18）『坐禅三昧経』（大正 15　p.270 上）；如華鬘枯朽　毀敗無所直　頂生王功德　共釋天王坐　報利福弘多　今日悉安在　此王天人中　欲樂具爲最　死時極苦痛　以此可悟意 ‥‥‥

（p.277 中）如頂生王、雖雨七寶、王四天下、帝釋分座、猶不如足。

（19）『正法念処経』（大正 17　p.164 上）；時頂生王到三十三天。爾時帝釋遊戯在於一切樂林、娯樂受樂。遥見頂生、即分半座、命之令坐。爾時頂生即與帝釋共坐一床。

（20）『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.056 下）；其四大薬叉見此亦皆退走、並詣四天王所、白言大王。今有四事大軍來至、我答皆被打退。告曰。此是曼陀多王有大福德、欲來帝釋宮所。我等非可共敵。汝等共我將諸香花種種供具、於前迎之。見已存問、即共往帝釋天宮。帝釋若見、即捨半座、分座而坐。

Mūlasarvāstivādavinayavastu, *Bhaiṣajyavastu*（Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts*, vol. Ⅲ　part 1　p.095）；tato rājā māndhātā cāturmahārājikān devān pratisaṃmodya devaiḥ parivṛto devāṃs trayastriṃśān gataḥ. śakreṇa ca devendreṇārdhāsanenopanimantritaḥ.

それからマーンダートリ王は四大天王に挨拶し、神々に囲まれて三十三天に行って、帝釈天から半座を提供された。

（21）『大智度論』（大正 25　p.172 下）；如頂生王、王四天下、天雨七寶及所須之物、釋提婆那民分座與坐。雖有是福、然不能得道。

（22）『阿毘達磨大毘婆沙論』（大正 27　p.519 下）；若能憶念曼馱多王與天帝釋共集會事、能知四趣。

（23）『鞞婆沙論』（大正 28　p.482 上）；於是頂生王、還從上下已、即於彼處立鍮婆、極大供養已、更從餘處飛昇天上、共釋提桓因半座。

（1）*AN*. 004-002-015（vol. Ⅱ　p.017）；etadaggaṃ bhikkhave kāmabhogīnaṃ yadidaṃ rājā　mandhātā.「比丘らよ、諸欲を享受する者たちの第一人者はマンダータル王である。」

Therīgāthā（vss. 486, 487）スメーダー尼の偈

cātuddīpo rājā mandhātā āsi kāmabhoginaṃ aggo /
atitto kālaṅkato na c' assa paripūritā icchā // 486 //
satta ratanāni vasseyya vuṭṭhimā dasadisā samantena /

na c' atthi titti kāmānaṃ atittā 'va maranti narā // 487 //

四洲（を統べた）マンダータル王は諸欲を享受する者の第一人者であったが、満足することなく死んだ。彼の欲望は満たされなかった。

たとい十方の曇天が七宝をあまねく降らせても、諸欲が満たされることはない。人は、けっして満足することなく死ぬ。

Apadāna（vol. II　p.532）

mandhātādi-narindānaṃ yā mātā sā bhavaṇṇave /
nimuggā 'haṃ tayā putta tāritā bhavasāgarā.　// 35 //
raññо-mātā mahesī ti sulabhan nāmam itthinaṃ /
buddhamātā ti yan nāmaṃ etam paramadullabhaṃ // 36 //

マンダータルなどの王らの母は有の海に沈んだ。息子よ、私（マハーパジャーパティー）は汝によって有の海から救済された。

女にとって「王の母」、「王妃」という呼称は得やすい。「ブッダの母」という呼称はもっとも得がたい。

Jātaka 258（vol. II　p.310）の偈文

yāvatā candimasūriyā (pariharanti) disā bhanti virocamānā /
sabbe va dāsā mandhātu ye pāṇā paṭhavissitā //
na kahāpaṇavassena titti kāmesu vijjati / (*Dhammapada* vs.186)
appassādā dukhā kāmā, iti viññāya paṇḍito //
api dibbesu kāmesu ratiṃ so nādhigacchati /
taṇhakkhayarato hoti sammāsambuddhasāvako //

月と太陽が（運行し）、四方を照らしつつ輝く限りの大地に住む生類は、すべてマンダータルの下僕である。

カハーパナが雨と降っても諸欲が満たされることはない。賢者は、諸欲は喜びなく苦であると知る。

彼（マンダータル）は天界においても諸欲において楽を得ない。正等覚者の声聞は渇愛の滅尽を喜ぶ。

（2）ヒンドゥー教の伝承におけるマーンダートリの概観は Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia*‘MĀNDHĀTĀ’の項目と菅沼晃編『インド神話伝説辞典』の「マーンダートリ」の項目に詳しい。

（3）*Mahābhārata* 3.126.25 では左脇から、*Viṣṇupurāṇa* 4.2, *Bhāgavatapurāṇa* 9.6.30 では右脇。

（4）例外として *DN.-A.*（vol. I　p.258）、*Suttanipāta-A.*（vol. I　p.352）においてマンダータル王の父の名が Varakalyāṇa とされている。Varakalyāṇa は *Jātaka-A.* 258 の伝承ではマンダータルの祖父にあたる。

（5）『婆沙論』（大正 27　p.627 上）、『倶舎論』（大正 29　p.044 上）などには湿生の例として名が挙がるが、*Mahāvastu*（vol. I　p.154）では化生（aupapāduka）とされる。

（6）*Mahābhārata* 3.126.28, *Viṣṇupurāṇa* 4.2.17, *Bhāgavatapurāṇa* 9.6.31.

（7）*Mūlasarvāstivādavinaya. Bhaiṣajyavastu*（Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts,* vol. III　part 1　p.067,097）, *Divyāvadāna*（Cowell 本　p.210）

（8）tena dvādaśavārṣikyām anāvṛṣṭyāṃ mahātmanā /
vṛṣṭaṃ sasyavivṛddhyarthaṃ miṣato vajrapāṇinaḥ // 3.126.39

偉大なる彼は、十二年間続いた旱魃に際して、帝釈天が見ているにもかかわらず、穀物の豊作のために雨を降らせた。

（9）一例を挙げると *Jātaka-A.* 258 ではマーンダートリが天界に滞在している間にも 36 人の

帝釈天が死にかわったとされる。

(10) 『頂生王因縁経』（大正 03　p.393 下）、『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.056 中）、*Bhaiṣajyavastu*（vol.Ⅲ　part 1　p.093）, *Divyāvadāna*（Cowell 本　p.211）

(11) 原文には‘nāṭaka’（舞踏者）とあるが、‘ñātaka’（眷族）に改めて読む。

(12) yad utārohapariṇāhau varṇapuṣkalatā svaraguptyā svaragupter. この箇所はテクストに欠落が認められる。cf. Hisashi Mathumura, *Four Avadānas from the Gilgit Manuskripts* (Canberra: Dissertation),1980,p.025.

(13) 『中本起経』のこの伝承は名を「文陀竭」（マーンダートリ）とするものの、筋は以下に見るニミ王の物語の筋に一致する。

(14) 『大宝積経』「菩薩見実会」とその異訳『父子合集経』では無量称王（無辺称王）、地天王、頂生（マーンダートリ）王の３人の物語につづいて、尼弥（ニミ）王の物語が語られる。前の３王がまったく同様の筋を有しているためここに挙げた。『大乗集菩薩学論』の記事は『父子合集経』の引用として無量称王の記事を載せている。

［2］次にニミが帝釈天から半座を分かたれた伝承を紹介する。

［2-1］ニミ（Nimi または Nemiya）はマーンダートリと同様に、ヒンドゥー教文献と仏教文献の両方に名の挙がる転輪王である。ヒンドゥー教ではイクシュヴァークの息子とされ、ミティラー王朝の創始者とされる (1)。仏教文献ではマハーサンマタからはじまる釈迦族の系譜の中にマカーデーヴァの子孫として名が挙がり、*Dīpavaṃsa*（ed. by Hermann Oldenberg, London, 1879, p.028）では‘Nemiya’、『起世経』（大正 01　p.363 下）、『起世因本経』（大正 01　p.418 下）では「尼寐王」とされ、『根本有部律』「破僧事」（大正 24　p.101 下）、『衆許摩訶帝経』（大正 03　p.934 下）では「儞彌王」とされている。ヒンドゥー教の伝承と同様に仏教文献でもニミはミティラーと関係が深い。

彼にまつわる伝説をマーンダートリのそれと比較した場合、大きく異なるのは、マーンダートリが天界に自ら赴くのに対し、ニミは帝釈天に招かれて天界に昇ることと、マーンダートリは天界で帝釈天から提供された半座に坐るだけではあきたらず、帝釈天を座からひきずり降ろして天界の王位を独占しようとするのに対し、ニミは帝釈天が申し出た天界における居住を慎んで断ることである。

［2-2］ニミが帝釈天から半座を分かたれる場面を中心に資料を紹介する。重要と思われる箇所に下線を付した。

(1) 『増一阿含経』050-004（大正 02　p.809 下）；天帝及諸天子遥見王來。釋提桓因曰。善來、大王。命令共坐。佛語阿難。王便就天帝坐。<u>王與帝釋貌相被服音聲一揆</u>。諸天子心中念言。何者帝釋何者爲王。又復念曰。人法當眴而俱不眴。各懷愕然無以別之。天帝見諸天有疑心復念言。我當留王使住。然後乃寤耳。

(2) *Jātaka-A.* 541‘Nimi-j.’（vol. Ⅵ　p.127）；sakko pi paṭinandittha vedehaṃ mithilaggahaṃ /　nimantyayi ca kāmehi āsanena ca vāsavo // 571 //

帝釈天もヴィデーハ国のミティラーに住む〔王〕を歓迎し、享楽と座とを提供した。

(3) 『六度集経』（大正 03　p.049 中）；帝釋自前。把臂共坐。<u>南王容體、更變香潔、顔光端正、與釋無異</u>。

(4) 『根本有部律』「薬事」（p.059 上）；往時泥彌轉輪王。往三十三天。帝釋請分座

而坐。受五欲樂。

Mūlasarvāstivādavinayavastu, *Bhaiṣajyavastu*（Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts* vol. Ⅲ part 1 p.112）；nimir nāma rājābhūc cakravartī yo devāṃs trayastriṃśān gataḥ śakreṇa devendreṇārdhāsanenopanimantrito divyaiś ca pañcabhiḥ kāmaguṇaiḥ samanvitaḥ samanvaṅgībhūtaḥ krīḍitavān.

ニミという名の転輪王があり、彼は三十三天に行って帝釈天から半座を提供され、天界の５つの感官の対象を享受した。

(5)『大宝積経』「菩薩見実会」（大正 11 p.432 中）；爾時尼彌王心不恐懼便昇堂上。爾時帝釋遥見尼彌王來、即作是言。善來、大王。便分半座命王令座。時尼彌王即就帝釋半座而坐。

『父子合集経』（大正 11 p.975 下）；時昵彌王容儀和悦身心不動。帝釋遥見即起奉迎。善來、大王、遠屈威神無至疲極。乃分半座而奉彼王、共相慰問。王乃就坐。

［2-3］上に紹介した資料の他にも、ニミにまつわる伝説を伝える資料が多く存在する。ただしそこではニミが帝釈天から半座を分かたれるくだりが欠けている。それらを紹介するために、以下に上記資料の全体の内容とそれに対応する記事を概観する。

（1）の『増一阿含経』050-004（大正 02 p.806 下）の粗筋は以下の通りである。

ミティラー城の大天 (2) という転輪王に金輪が現れ、その輪が導くままに兵をひきいて東界、南界、西界、北界に赴き、そこの民を十善をもって導いて支配する。彼に転輪王の七宝（輪宝・象宝・馬宝・珠宝・女宝・主蔵宝・典兵宝）が出現する。大天王が天下を久しく治めた後、自身に一本の白髪を見つけ、長生という太子に国政を委ねて出家する。長生も大天と同様に白髪を見るまで四天下を支配し、冠髻という太子に国政を委ねる。同様にして八万四千代の転輪王が過ぎ去り最後の転輪王が荏（ニミ）王であった。

荏王は正法をもって国をおさめ、やがてその善政は帝釈天の賛嘆するところとなり、帝釈天は荏王に会うことを望み、窮鼻尼天女を使者として遣わしてから、侍御に命じて飛行馬車をミティラーに駆らせ荏王を三十三天に招く。荏王は招きに応じて国政を臣に委ね、馬車に乗る。侍御は悪道と善道のどちらを通って天界に赴くかをたずね、荏王がその両方を見たいと答えたため、侍御は両道の中間を通って天界に向かう。帝釈天は「善來、大王」と言って荏王を迎えて、命じて共に坐らしめる。荏王は帝釈天の座に就いて荏王と帝釈天との間には相貌、被服、音声の違いがなく、諸天子はどちらが帝釈天でどちらが荏王かわからなくなった。人はまばたきするが、２人ともまばたきしないので区別がつかず、帝釈天が「私は王をここに留めて住まわせようと思うが」と言ったことではじめて見分けがついた。帝釈天は荏王に天界に住まうことを勧めるが、荏王は白髪が生じたら出家するのが父王の命であることを理由に断る。荏王が天界にいたのは須臾の間であったが人間界では 12 年の歳月が過ぎていた。荏王は諸天子と別れて本国に帰ることを欲し、帝釈天は侍御に命じてミティラーまで送らせる。荏王は白髪を見つけると、善尽に国政を委ねて出家する。善尽は伝統をまもらず、七宝を失い、人民は短命になり、悪法が生じた。

大天王は釈尊の、荏王は阿難の、善尽はデーヴァダッタの前生である。

この『増一阿含経』050-004 は *MN*. 083‘Makhādeva-s.’（vol. Ⅱ p.074）、『中阿含

経』067「大天榛林経」（大正 01　p.511 下）の異本である。

MN. 083 では王統を Makhādeva 王― Makhādeva 王の息子―８万４千人の王― Nimi 王―Kaḷārajanaka という次第にする。ニミを天界に連れて行くのは帝釈天の御者であるマータリ（Mātali）である。帝釈天がニミとともに坐るくだりはない。マカーデーヴァは釈尊の前生であるが、その他の王が誰の前生であるかは言及されていない。

『中阿含経』067 では、大天(2)―太子（名に言及なし）―８万４千の転輪王―尼弥（ニミ）となり、最後の伝統を絶えさせる王が言及されない。またここでも、尼弥王は「善來、大王。善來、大王。可與三十三天共住娯樂」と呼びかけられるのみで、帝釈天と共坐することはない。

（2）の *Jātaka-A.* 541（vol.Ⅵ　p.095）では Makhādeva―王子（名前に言及なし）―８万４千人に２人足りない転輪王― Nimi ― Kaḷārajanaka という次第になっており、特にニミがマータリの御するヴェージャヤンタ（Vejayanta）車に乗って地獄と天界をくまなく観察するくだりが詳細に語られている。ここではニミは天界に到着して帝釈天から座を提供される。ただしそれがいかなる座であるか明記されていないため、『増一阿含経』のように帝釈天の座を得たのか否かは不明である。

また *Jātaka-A.* 009‘Makhādeva-j.’（vol.Ⅱ　p.137）にもマカーデーヴァとニミのことが語られている。この２つの *Jātaka-A.* の記事ではマカーデーヴァ、ニミの両者がともに釈尊の前生であり、『増一阿含経』050-004、*MN.* 083、『中阿含経』067 の伝承と異なっている。

（3）の『六度集経』（大正 03　p.048 下）には、摩調王から「千八十四世」を経た南（ニミ）王が摩婁（マータリ）という御者が駆る車に乗って天界に赴き、帝釈天は自らすすんで南王の臂をとって共に坐る。すると南王の容体は香潔になって、顔光端正にして帝釈天と違いがなくなった、とある。ここでは南王が釈尊の前生である。

（4）の『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.058 中）では「中阿笈摩」に広説をゆずり、大天の記事に続けて泥弥多（Nimi）の物語が述べられる。泥弥多王は釈尊の前生であり、三十三天において帝釈天から座を分かたれて、五欲楽を受けたとある。梵本 *Bhaiṣajyavastu* でも同様であり、大天（Mahādeva）の記事に続いてニミについて語られ、ここでもニミは帝釈天から座を提供される。

（5）の『大宝積経』「菩薩見実会」（大正 11　p.432 中）とその異訳『父子合集経』（大正 11　p.975 下）では無量称王（無辺称王）、地天王、頂生（マーンダートリ）王の３人の物語につづいて尼弥（ニミ）王の物語が語られる。前の３王が帝釈天の座について後に帝釈天を退けて独占しようと考えて地に落ちるのと好対照をなして、ニミは座を受けた後に仏の正法を護持するが故に閻浮提に帰る。

（1）Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia*‘NIMI’の項目、菅沼晃編『インド神話伝説辞典』の「ニミ」の項目参照。

（2）「大天」の原語としては、パーリでは‘Makhādeva’に統一されているが、*Bhaiṣajyavastu* に見出される‘Mahādeva’の方が相応しいと考えられる。

［3］上に見たニミが帝釈天に招かれてマータリの御する戦車に乗って天界に行き、半座

を提供されるくだりは、*Mahābhārata*（3.44）によく似た記事を見出せる。帝釈天がアルジュナに半座を提供する場面である。

パーンドゥの５王子の一人であるアルジュナが天界の御者であるマータリに招かれ、その御する戦車に乗って帝釈天のところへ武器をもらいに行く。道中アルジュナは、苦行によって天界を獲得した王仙、戦死した勇士たちが住む世界、帝釈天の乗象アイラーヴァタ、シッダやチャーラナの住む都、天女の群れの住むナンダナの森を見る。インドラの都アマラーヴァティーに入り、神々にたたえられつつ戦車から降りて帝釈天に歓待される。帝釈天は彼の両腕をとって、帝釈天の座に坐り、その傍らにアルジュナを坐らせる。帝釈天は、彼の頭に接吻し、恭しく頭を下げている彼を膝に乗せる。帝釈天の命令によってアルジュナは帝釈天の座に登った。第２の帝釈天のように (1)。

ここには「半座」‘ardhāsana’という語は用いられていないが、この場面は後にも語られ、そこでは「半座」と表現されている (2)。「半座」とは２人の人物が並んで一つ座に坐るだけではなく、ひとりがもうひとりを膝にのせることをも意味するようである。

(1) 原文は以下の通り。

tataḥ śakrāsane puṇye devarājarṣipūjite /
śakraḥ pāṇau gṛhītvainam upāveśayad antike // 20 //
mūrdhni cainam upāghrāya devendraḥ paravīrahā /
aṅkam āropayām āsa praśrayāvanataṃ tadā // 21 //
sahasrākṣaniyogāt sa pārthaḥ śakrāsanaṃ tadā /
adhyakrāmad ameyātmā dvitīya iva vāsavaḥ // 22 //

それから帝釈天は彼（アルジュナ）の両腕をとって、神々と王仙に敬われる神聖な帝釈天の座において傍らに彼を坐らせた。

その時、彼の頭に接吻し、敵の勇士を殺す神々の王は、恭しく頭を下げている彼を膝にのせた。

その時、千眼者（帝釈天）の命令によって、プリターの子にして、限りなく偉大なアルジュナは帝釈天の座に登り、第２の帝釈天のようであった。

(2) sa sametya namaskṛtya devarājaṃ mahāmuniḥ /
dadarśārdhāsanagataṃ pāṇḍavaṃ vāsavasya ha //（3.45.10）

その大仙（ローマシャ）は神々の王（帝釈天）に会って敬礼し、帝釈天の半座を得ているパーンドゥの子（アルジュナ）を見た。

śakrasyārdhāsanagataṃ tatra me vismayo mahān /
āsīt puruṣaśārdūla dṛṣṭvā pārthaṃ tathāgatam //（3.89.6）

最上の人（ユディシュティラ）よ、そこで、帝釈天の半座を得ているプリターの子（アルジュナ）がそのようであるのを見て、私（ローマシャ）には大きな驚きがあった。

dadāv ardhāsanaṃ prītaḥ śakro me dadatāṃ varaḥ /
bahumānāc ca gātrāṇi pasparśa mama vāsavaḥ //（3.164.52）

与える者の最上者である帝釈天は喜んで私（アルジュナ）に半座を与えた。帝釈天は恭しく私の身体に触れた。

［4］上に帝釈天が特定の人物に半座を提供する資料を見た。他にも、特定の人物ではなく、「このような人に帝釈天は半座を提供する」という意味合いの資料がある。

『大薩遮尼乾子所説経』と『正法念処経』には、転輪王は七宝を具足しているので四天下

に王となり、帝釈天と座を分かつことができるとある(1)。

また仏頂系儀軌には、明呪の力で成就者が帝釈天から半座を分けられるほどになるといった意味合いの表現が数多くある(2)。

(1)『大薩遮尼乾子所説経』（大正 09　p.331 下）；大王當知。轉輪聖王具足如是七寶用故、王四天下及諸龍王二種天王。謂四天下三十三天。共天帝釋分座而坐。以依離一瞋恨惡心不善業道。

『正法念処経』（大正 17　p.009 下）；如是輪王七寶具足王四天下。能與龍衆天衆同坐。天處有二四天王天三十三天。帝釋天王分座而坐。

(2)『菩提場所説一頂輪王経』（大正 19　p.208 下）；帝釋大威德　若見成就者　分座而同坐及餘威德天……

（p.215 上）以身光照曜、一切成就者纔思惟一切悉皆成辦。所至帝釋處帝釋分與半座。無有與彼等。顔貌勇健智慧威德。無有等同者。……

（p.216 中）帝釋與半座

『一字仏頂輪王経』（大正 19　p.239 中）；其天帝釋見是人來分座同坐。其諸大天亦皆分座。三界諸天見是人來。傲叛不起迎接敬虞、則皆頭破如蘭香枝。……

（p0254 上）或處天帝釋宮分座同坐。顔貌威光精進智慧。一切天人無有匹者。……

（p.255 中）是時呪者則得證爲劍仙、騰往須彌山頂。一切天見皆大驚怕伏爲伴從。是天帝釋分座同坐。隨至天宮位皆如是。

『五仏頂三昧陀羅尼経』（大正 19　p.274 下）；成此呪者怒目嗔喝一切天龍八部鬼神、皆得惶怖四散馳走。其天帝釋見是人來分座同坐。其諸大天亦皆分座。……

（p.281 中）或處天帝釋宮分座同坐。身貌威光精進智慧。一切天人無有疋者。

『一字寄特仏頂経』（大正 19　p.287 中）；若有持此大明王、我等所有一切天、見彼皆起分半座與坐。時世尊告天帝釋言。天帝法爾。成就頂輪者、天帝釋等諸天見者必分座。

（p.295 下）於天阿脩羅鬪戰得無能勝。往於帝釋帝釋與半座。……

（p.298 中）帝釋與半座爲大持明王。住一大劫。……

（p.298 下）所去處於彼彼帝釋與半座。